

第3号 熊本市後藤是山記念館だより

淡 成 居

水墨画家・近藤浩一路(こんどう こういちろう)が昭和8年12月に淡成居を訪れた際、「石一つころげて庭上(ていじょう)冬に入る」という句を詠んでいます。そしてその句を賛し、淡成居の門と門に向かう坂を描いた幅を残しています。是山はこの幅を秋冬の交わる季節に掲げ、自らの半生を顧みることが少なくなかったと言います。

水墨画家です。大正時代は読売新聞社で漫画や挿絵の描き手としても活躍しています。実はこの句を詠んだ時にはもう一句、「鴈(もず)よりも早起なりし君にして」という句も残しています。当時「淡成居」の周辺は、熊本県蚕業試験場(現在の知事公舎のあるところもその一部)の桑畑のほか、野菜畑などが見渡す限り広

って、昭和2年、居を構えたのでした。『後藤是山遺文「そのころ」』には、この風景を「秋雨の蕭條(しょうぎょう)たる夕べなどは、土手の草むらから鶉(うずら)が這い登って来る、全く世捨て人の栖(すみか)とも、思われるところであつた」と回想しており、是山にとって自然豊かで、のびやかで、ほっとする場所だったようです。しかしこの風景は 残念ながら

石一つころげて庭上冬に入る 浩一路

昭和7年から始まった水前寺公園土地区画整理事業によって一変し、是山の愛したこの凹道も埋め立てられることになりました。近藤画伯もその計画を知って、「この(門への)坂がなくなったら、もう半分の値うちも無くなってしまふ」と、昭和8年の暮れ、あわてるように鴈より早起きしてここを訪れ、写生したとのことでした。

年下で、明治、大正、昭和に活躍した画家でした。生まれ故郷の山梨県南部町には『近藤浩一路記念南部町立美術館』があります。東京美術学校時代、藤田嗣治と同級で、もともと洋画から出発した水

がり、豊肥線の水前寺駅舎がちょうどなんと見えていたと言います。そして淡成居のある場所は、腕を伏せたような円形の小高い土地で、まわりは深さ約2間、幅も同じく2間ほどの凹道に囲まれていたそうです。どおりで、この幅には淡成居の門に向かって坂が描かれていると思えました。

是山はこの凹道のあの風景がとても気に入っていたので、昭和2年、居を構えたのでした。『後藤是山遺文「そのころ」』には、この風景を「秋雨の蕭條(しょうぎょう)たる夕べなどは、土手の草むらから鶉(うずら)が這い登って来る、全く世捨て人の栖(すみか)とも、思われるところであつた」と回想しており、是山にとって自然豊かで、のびやかで、ほっとする場所だったようです。しかしこの風景は 残念ながら



「淡成居」の門を描いた近藤浩一路の水墨画と句

は山はこの凹道のあの風景がとても気に入っていたので、昭和2年、居を構えたのでした。『後藤是山遺文「そのころ」』には、この風景を「秋雨の蕭條(しょうぎょう)たる夕べなどは、土手の草むらから鶉(うずら)が這い登って来る、全く世捨て人の栖(すみか)とも、思われるところであつた」と回想しており、是山にとって自然豊かで、のびやかで、ほっとする場所だったようです。しかしこの風景は 残念ながら

は山がこの凹道のあの風景がとても気に入っていたので、昭和2年、居を構えたのでした。『後藤是山遺文「そのころ」』には、この風景を「秋雨の蕭條(しょうぎょう)たる夕べなどは、土手の草むらから鶉(うずら)が這い登って来る、全く世捨て人の栖(すみか)とも、思われるところであつた」と回想しており、是山にとって自然豊かで、のびやかで、ほっとする場所だったようです。しかしこの風景は 残念ながら

大正デモクラシーの中の是山(その1)

高まる郷土史熱



25歳頃の是山

後藤是山(ごとうぜざん)が徳富蘇峰の国民新聞社での記者留学を終え九州日日新聞社(以下「九日」という。)に帰ってきたのは、

明治45年(1912年)、26歳の時です。時代はすぐに大正時代へと移り、大正デモクラシーの中には山も飛び込むことになります。

大正デモクラシーとは、明治末から大正末までの時代の中で、政治や社会、文化の様々な面で、民主主義的傾向や自由主義的な傾向が高まった時代をいいます。

同時に、この時代は地方都市の成長も顕著で、熊本市を見ても、明治22年(1889年)の市発足当時の人口が4万3千人だったのに対し、大正10年(1921年)と14年(1925年)の近隣町村との合併を経て、市域は7倍、人

口も13万9千人に拡大しています。

また新聞の発行部数も全国的に拡大し、日本新聞年鑑によると大正14年には全国で640万部に達しています。暮らしの中に次第に新聞を読むことが浸透していった時代でもあり、新聞が人々へ与える影響も大きくなっていました。このような中で熊本では、大正期、新聞を通して郷土史熱が高まっています。

◆進む古墳破壊に警鐘を鳴らす是山

地方都市の開発は生活を豊かにする一方で、貴重な史蹟の破壊が進んでいきます。明治44年には帝国議会でもそれが問題となり、「史蹟及天然記念物保存ニ関スル

建議案」が可決され、土地の開拓、

道路や鉄道の開通、工場の設置などから史蹟などを保護することが大きな課題となつていきます。宮内省(当時)もその課題に対処すべく古墳調査を進め、大正2年

(1913年)1月には宮内省御用掛増田于信(ますだうしん)氏が宮崎の調査の後、阿蘇や八代、芦北などの古墳群の調査ため来熊します。当時26歳だった是山はその調査に1月14日から20日まで同行し、連日調査状況を九日に掲載していきました。

この時の1月17日、18日付けの九日の紙面には「増田氏の阿蘇古墳調査(上)、(下)」を連載し、調査には是山のほか熊本県庁から



増田于信氏との記念写真。熊本での墳墓調査が終わった後、大正2年1月21日に撮影。

矢野氏、熊本師範学校教諭の角田

政治(すみだまさじ)氏が同行したことや調査の状況を図を用いながら詳しく説明しています。また1月18日からは八代に向かい、火の国造(くにつこ)の御墓の調査に立ち会いますが、多くの古墳が、桃林などに変わり惨憺たる状況になっていると嘆いています。

そして是山はこの間の調査の総括として、同年1月24日の九日の第一面に「古墳保護の必要」と題し論説を出します。そこには、増田氏が調査した古墳の50ヶ所のうち、阿蘇郡の一部を除いてはほとんど原形をとどめず、山林、果樹園、畑に削り取られていて、ひどいものは石棺を暴かれていて、今の現状が書かれています。そのうえで、大和朝廷時代からの歴史にも触れ、現代は古墳に対する尊敬心を失っており、物質的文明の進歩によってますます古墳の存在を危うくしていると警鐘を鳴らすとともに、学問的研究の必要性を訴えています。そして、「古く歴史を討(たず)ねて、新しく吾人(ごじ

ん）の来る所以（ゆえん）を知ることとは、国民的自覚の第一歩」である」と締めくくっています。

このような地方からの言論は人々の史蹟などへの関心と理解を高めていき、国は大正8年（1919年）には「史蹟名勝天然紀念物保存法」を制定し、保護や保存に力を入れていきました。

◆高まる郷土史熱の中での連載

新熊本市史には「大正期の郷土史界は新聞紙上で花開くという感じである」と書かれています。新聞が単なる政党機関紙としての役割だけでなく、大正時代に入るとますます文化への理解・発展に欠



是山が出版時校正に使った『肥後の勤王』。大正4年に東京出版社から出版された。

かせないものになっていきました。

これは是山が九日の記者になった時から目指したことでもありました。平野流香や宇野東風（はるかぜ）らの郷土史家が新聞掲載を進める中、是山も大正2年の冬から翌3年の末まで、「肥後の勤王」を120回にわたり九日に連載し好評を博しました。是山はこれを大正4年『肥後の勤王』として東京出版社から出版しています。是山が29歳のころです。このほかにも大正13年4月から182回にわたって連載された「梶山九江（肥後に於ける文人画）」の力作などもあり、熊本の郷土史発展に込めるべく掲載を続けていきました。

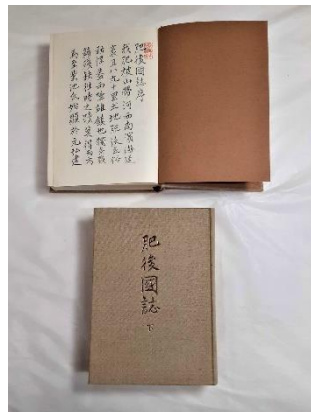
◆『肥後国誌』の増補刊行

大正時代に入ると様々な郷土史料が盛んに発刊されていきます。細川家歴史編纂所からは大正2年に肥後藩の維新史料集となる『肥後藩国事史料』が出版され、大正4年には角田政治が『熊本市誌』を、同6年には『熊本県誌』を発刊していきます。

そんな中、是山は肥後全体の歴史や地誌が集成された概説書が必要だとし、『肥後国誌』を増補して、大正5年と6年に上下巻に分けて刊行します。是山の30歳、31歳の時です。

『肥後国誌』は、肥後国の歴史と地誌を、郡別に、さらに手永別に分け、石高、小村、名勝旧跡、山や川、神社、寺院などについて説明されているもので、享保13年（1728年）に成瀬久敬が著した『新編肥後国志草稿』をもとに、明和9年（1772年）に森本一瑞がまとめたものです。明治の初め、熊本新聞の創設者・水島貫之らが増補しますが、この時の増補では肥後国全体が網羅されていなかったため、是山がその不足の部分であった天領の天草郡や相良藩の球磨郡、阿蘇の一部を、『天草島鏡』『求麻外史』『南郷事蹟考』で補い、肥後国全体をほぼ網羅したものに仕上げました。是山の『肥後国誌』の増補刊行は、熊本県教育会による発議が発端となり、九日の事業として実施されたもので

昭和47年に復刻された『肥後国誌』



した。この是山増補の『肥後国誌』は昭和47年（1972年）に復刻され、現在でも熊本の郷土史を学ぶ上での貴重な史料となっています。この時の復刻版では、歴史学者・松本寿三郎氏によってさらに増補され、索引も加えられて、その部分は『肥後国誌補遺・索引』として上下2巻に加え発刊されています。

このように若き是山は、大正デモクラシーという時代の中で、高まっていく郷土史熱に新聞を通して多くの人々に応えていきます。このことはのちの是山の郷土史家としての素地も作っていきました。大正デモクラシーの時代の是山の活躍はこれだけではありません。次号でも引き続き紹介します。

〈参考文献〉新熊本市史 第7・8巻 熊本市

熊本県史 近代編第3巻 熊本県
熊本県大百科 熊本日日新聞社

記念館ニュース

「淡成居で論語を学ぼう！」を開催しました。

後藤是山記念館では、去る11月24日(日)、自主講座として「淡成居で論語を学ぼう！」(大谷翔平選手の愛読書『論語と算盤』の原点に迫る)を開催しました。

「淡成居」は、時習館の第2代教授・荻孤山の旧居と伝わる建物の一部を移築したものです。

是山は大正元年から北千反畑町



淡成居で受講する皆さん

にあった荻孤山の旧居に借家として住み、この建物が解体されることとなって、昭和2年にこの地に新築し引っ越して来ました。そのとき大工さんから旧居には床の間や縁側、天井、壁などにはなかなか立派な材料が使われているからと、それを使うよう勧められ、旧居の一部を移築したといえます。

荻孤山が教授を務めた時習館では朱子学が中心でした。当然『論語』も教えられており、孤山も論語について語ることが多かったと思います。

そこで今回は淡成居に論語講師・松崎昇先生をお招きし、講座を開催することにしました。15

名の参加を得て、床の間と次の間はいっぱいになりました。「学而(かくじ)」から「陽貨(ようか)」までのうち、順に16章を素読し、講師が解説を加えていかれました。当日は天気にも恵まれたものの寒波で冷えたのですが、皆さん熱心に講座を聞かれました。「楽しかった」「また続編を開催してほしい」といった声が聞かれました。

後藤是山記念館へ行こう！

企画展 『平安文学展 (後半)』を開催中

是山と交流の深かった与謝野晶子は、「新訳源氏物語」の後、さらに「新新訳」の源氏物語にも取り組みました。当館ではNHK大河ドラマ『光る君へ』の放送に関連し、企画展『平安文学展 (後半)』を開催しています。



後半では、江戸時代の国学者・北村季吟(きたむらきぎん)の著した『源氏物語』の注釈書『湖月抄』に幕末から明治時代の国学者・猪熊夏樹が増注訂正したものや、同じく北村季吟の『枕草子』の注釈書『春曙抄』に明治時代の国文学者・鈴木弘恭が増注訂正したもの、そして『古今和歌集』に本居宣長が注釈したものに江戸時代の随筆家・山崎美成が増注訂正した『頭書古今和歌集遠鏡』などを展示しています。

第3号

熊本市後藤是山記念館だより
『淡成居』

発行日

令和6年(2024年)12月8日

編集・発行

熊本市後藤是山記念館長 植木英貴
(熊本市文化財課所管)

〒860-0950

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

電話・ファックス

096-382-4061

開館時間

午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29～1/3)

入館料

大人 200円

小人 100円

